

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ジョージ・ブラウン・コレクションの中のソロモン諸島

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関根, 久雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002257

ジョージ・ブラウン・コレクションの中のソロモン諸島

関根久雄

(名古屋大学大学院国際開発研究科)

1. G. ブラウンとソロモン諸島

1879年のある日、ジョージ・ブラウンは、シドニーからニューブリテン島の任地へ向かうべく、交易船リップル号の船上にいた。同船のファーガソン船長 (A.M. Ferguson) は、1870年頃より、ソロモン諸島西部地域などで、地元民や現地に滞在するヨーロッパ人との間で交易をおこなっていた (Bennett 1987 : 364)。このリップル号に便乗することで、ブラウンはファーガソンが交易目的で寄港するソロモン諸島 (図1) の各地を訪問する機会を得たのである。これが、ブラウンとソロモン諸島との関わりのはじまりであった。

彼は自伝の中で、「(1879年に) 寄港したところでは、チーフ (政治リーダー) も一般の人びとも皆、キリスト教宣教師が活動することに抵抗感をもっていた」 (Brown 1978 [1908] : 515) と述べている。それから20数年後、ブラウンは、自らもソロ

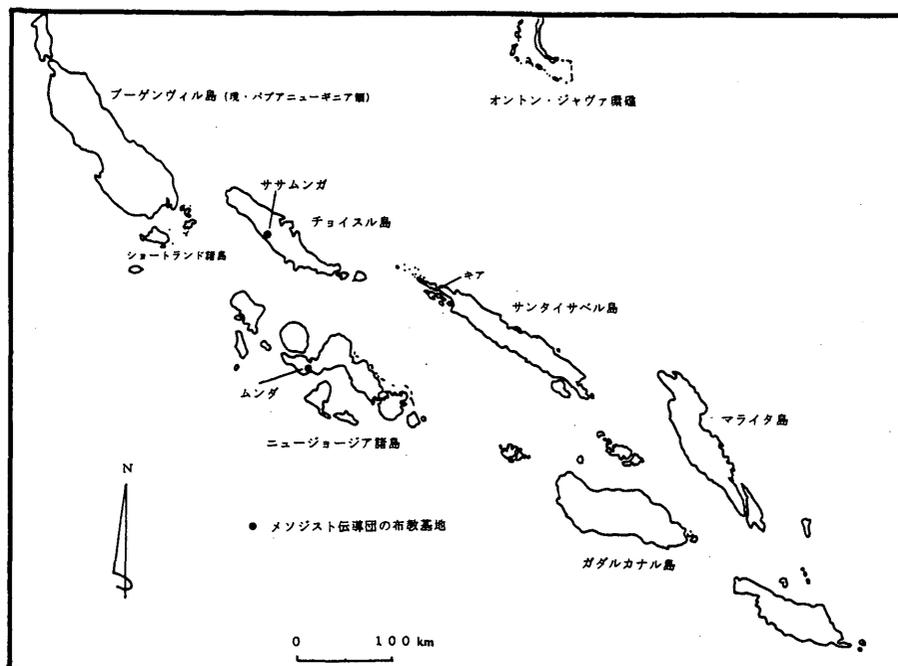


図1 ソロモン諸島 (サンタクルーズ諸島を除く)

モン諸島で布教活動をはじめることになる。

1901年に、ブラウンが属するメソジスト伝道団 (Australian Wesleyan Methodist Missionary) は、教団として正式にソロモン諸島における布教開始を決定した。その端緒は当時フィジーに滞在していたソロモン諸島出身者による宣教師派遣要求であり (Brown 1978 [1908] : 518)、それは次のような状況を反映したものであった。

1870年以降、オーストラリアのクィーンズランド地方やフィジーなどのサトウキビ農園や綿花農園で働く労働者を確保するため、ソロモン諸島民や他のメラネシア島嶼民の多くが、オーストラリア人などによって強制的に (誘拐のようにして) 連れ去られた。このような労働者狩りを「ブラックバーディング」 (black-birding) という。1911年にオーストラリア政府が太平洋島嶼民の強制送還を決定するまで、マライタ島を中心とするソロモン諸島各地から、約27,000人がつれていかれたという (Alasia 1988 : 115)。ただし、ブラックバーディングのリクルーターは、激しい首狩り襲撃を繰り返すニュージョージア諸島へは近づこうとしなかったため、同諸島出身者は極めて少なかった (Corris 1973 : 30-31)。農園労働は通常3～5年程度の期限付きであり、労働者はその期限を終えれば出身地の島に帰ることができた。帰還者の多くは、農園労働に連れていかれる前と同じ生活環境、すなわち、祖霊・精霊を崇拜し、つねに戦闘や襲撃の恐怖と隣り合わせの社会に再び身を置くことになった (Bennett 1987 : 121, 124 ; 関根 1995 : 418-419)。海外の農園で働く過程でキリスト教に接し、改宗したソロモン諸島民たちは、出身地への帰郷を切望するものの、そのような社会環境を容認することはできなかった。ゆえに彼らは、帰郷する際に宣教師の同行を強く求めたのである。

1901年にブラウンは、メソジスト伝道団の指示でソロモン諸島を視察した。ソロモン諸島では、すでに19世紀後半期から英国国教会系メラネシア伝道団 (Melanesian Mission) が、ガダルカナル島、マライタ島、サンクリストバル島、サントイサベル島など、ソロモン諸島の比較的面積の広い島じまで積極的に布教活動をおこなっていた。しかしながら、ニュージョージア諸島 (ニュージョージア島、ヴェラ・ラヴェラ島、コロンバンガラ島、レンドヴァ島、ヴァングヌ島、シンボ島、ラノンガ島など) やチョイスル島などを含むソロモン諸島西部の島じまでは、在来の宗教に固執する地域も多くみられた。メソジスト伝道団は、英領ソロモン諸島駐在弁務官のウッドフォード (C. M. Woodford) の提案に基づき、それまでに一度も布教活動がおこなわれたことの

ないニュージョージア諸島を最有力候補地としていた (Brown 1978 [1908]: 519; Tippet 1967: 55; Golden 1993: 40)。ブラウンの視察は、その実現可能性を、現地の有力者などとの対話から判断するためのものであった。そこでブラウンは、当時ソロモン諸島において最も強力な武装集団 (首狩り襲撃を目的とする) を率いる政治リーダー (ビッグマン) であったニュージョージア島北部マロヴォ地域一帯のベラ (Bera)、同島南部ロビアナ地域を支配していたインガヴァ (Ingava)、そしてシンボ島のペランガナ (Belangana) などと会っている (Brown 1978 [1908]: 519; Tippet 1967: 55)。当時、いずれの政治リーダーも、おしなべてキリスト教宣教師による布教活動を拒否する態度をとっていた。しかしブラウンは、「この地域の人びとはこれまで一度も宣教師を受け入れたことがないので、彼らのキリスト教に対する嫌悪感、他地域の人びとからもたらされる噂による偏見にすぎない」 (Tippet 1967: 55) ものであり、宣教師による実際の活動を通して、彼らの偏見は払拭できると考えた。それに加えて、すでに定住していたイギリス人がいたことも後押しとなった。ニュージョージア島ロビアナ地域には1875年頃からウィッカム (F. Wickham) が、1892年頃からウィートリー (N. Weatley) が、地元民やヨーロッパ人との交易を目的に居住し (Golden 1993: 206, 227)、交易や婚姻を通じて地元民の信頼を得ていた。そして彼らもまた、そのときまでの数年間に62名ものヨーロッパ人が地元民に殺された経緯から、宣教師の布教を待ち望んでいた (Tippet 1967: 55)。そのような事情から、メソジスト伝道団が布教活動を行うにあたって彼らの協力を得ることも、十分に期待できた。

このように、メソジスト伝道団は、(1) フィジーで改宗したソロモン諸島民からの強い要請、(2) 現地住民による根拠の薄いキリスト教布教に対する抵抗心 (つまり、布教をはじめると人心を翻意させることができる)、(3) 現地に住むヨーロッパ人の期待の3点と、メラネシア伝道団と地域的に競合しないことを主要な根拠として、ソロモン諸島ニュージョージア諸島における布教開始を決定した。そしてブラウンは、ニューブリテン島における布教実績から、最初の派遣伝道団を率いて現地へ赴く任務を受けたのである。

1902年、ブラウンは、宣教師ゴルディー (J.F. Goldie)、同ルーニー (S.R. Rooney)、大工のマーティン (J.R. Martin)、フィジーに住むソロモン諸島民1名、フィジー人教師4名 (そのうち2名は夫人同伴)、サモア人教師3名とその夫人たち、そしてサモ

ア在住のニューヘブリデス諸島（現・ヴァヌアツ共和国）民1名とともに伝道団を組織し、5月23日にニュージョージア島ロビアナに到着した（Brown 1978 [1908] : 523）。このときブラウンは、67歳であった。

2. G. ブラウン・コレクションからみる改宗期のソロモン諸島

ブラウンは数回にわたりソロモン諸島を訪問しているものの、実際の滞在はいずれも短期間である。資料のなかには、航海の途中に立ち寄っただけのところのものも含まれている。たとえば、サントイサベル島キア地域には、オントン・ジャヴァ環礁へ向かう途中に1泊しただけであるが、藍染めの樹皮布や石灰用容器、彫刻付きの楽器、袋類を収集している。また、ソロモン諸島における布教基地を設置し、比較的長期に滞在したニュージョージア諸島においても、1901年の視察旅行で半月前後滞在しただけである。1902年に任地に到着した後も、約20日後には英領ソロモン諸島政府のウッドフォード弁務官と共にオントン・ジャヴァ環礁へ視察旅行に出ている。約20日間の旅行を終え、再びニュージョージア島へ戻ったが、当時彼はオーストラリアにおいてメソジスト伝道団の要職にあったため、まもなくして、ソロモン諸島における布教活動の一切を宣教師のゴルディーとルーニーに託し、この地を離れた（Brown 1978 [1908] : 525-527 ; 石森 1988 : 54-55）。これらの短い滞在期間の中でブラウンが収集した資料は約700点にのぼり、彼のコレクション全体の中でも、ニューブリテン島とニューアイルランド島に関する資料と並び最も多い。

ブラウンが収集したソロモン諸島関係の資料を、本来の使用目的に基づいて分類すると、(1)生活用品(日用品)、(2)装身具、(3)戦闘関係、(4)儀礼関係の4項目に大別できる。表は、各項目に含まれる資料名、収集地(島)名、収集数を掲載したものである。ただし、収集地に関しては、「ソロモン諸島」と記録されているだけで具体的な島名が不明であるものも多い。それらは資料の種類ごとに「その他」の欄に記載してある。なお、表中の略称は島名をあらわす。それぞれの名称は以下の通りである。

NG : ニュージョージア諸島、CS : チョイスル島、SL : ショートランド諸島、ML : マライタ島、MK : サンクリストバル島、SC : サンタクルーズ諸島、OJ : オントン・ジャヴァ環礁、GC : ガダルカナル島、BV : ブーゲンヴィル島、SY : サントイザベル島)

付表 ソロモン諸島収集資料

(1)生活用品/日用品 (総数 236)

	NG	CS	SL	ML	MK	SC	OJ	GC	BV	SY	その他
袋	2	2							1	3	4
手斧の刃	1						9				
手斧							1				1
きさげ、へら			1				3	2		2	
バッグ											7
籠	6		4						1		27
鉢								2			5
容器	3								7		
匙	1										1
箱							1				2
ザル											2
うちわ			1								
櫛 (日常用)											1
擬似餅	2										1
釣り糸							1				
釣り針							3				48
漁網		2									
浮子											2
あか波み							1				
石灰用容器	10									5	
敷物			5				1				4
パイプ											2
壺・土器			2								
樹皮たたき棒	2										
樹皮布										1	10
組み紐	1						2				2
櫛											4
サンダル							1				
竹細工				3							
玩具/独楽	4										7
草									1		
石											1
木の実							2				2
藤											1
計	32	4	13	3	0	0	25	4	10	11	134

上記の分類において、地域的にはニュージョージア諸島の資料が最も多い。項目別では、生活用品(日用品)が全体の約36%、戦闘関係が約35%とほぼ同数であり、これらだけで70%を越える。また、上記の装身具、戦闘関係、儀礼関係の3項目に含まれる資料のなかには、性格的に複数の項目にまたがるものもある。たとえば、「首飾り」や「腕輪」のなかには、装身具であると同時に戦闘における活動を通じて名声

(2) 装身具 (総数 114)

	NG	CS	SL	ML	MK	SC	OJ	GC	BV	SY	その他
ビーズ				1							1
装身具/装身具						1					4
入れ墨道具一式							1				
耳飾り	2										3
首飾り	5										14
鼻飾り											8
腰帯/帯											4
腕輪	4	5			1						53
貝殻	2										5
計	13	5	0	1	1	1	1	0	0	0	92

(3) 戦闘関係 (総数 232)

	NG	CS	SL	ML	MK	SC	OJ	GC	BV	SY	その他
帽子	6										
弓											9
矢											150
矢じり											1
棍棒		2	1	3	5				6		9
槍											32
カヌー模型	1										2
カヌー											1
カヌー船首飾り	2		1								
カヌー用装飾	1										
計	10	2	2	3	5	0	0	0	6	0	204

(4) 儀礼関係 (総数 73)

	NG	CS	SL	ML	MK	SC	OJ	GC	BV	SY	その他
儀仗				2							
儀礼用楯	1								8		
舞踏用盾	1										1
仮面											1
彫刻品	4										8
織機/布						6					
彫刻付き楽器										1	
笛											1
口琴	6										
バンパイブ		3									
貝貨	10	3		1						3	10
財貨		2									
頭蓋骨(装飾付)	1										
計	23	8	0	3	0	6	0	0	8	4	21

	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
島別計	78	19	15	10	6	7	26	4	24	15	451

総合計(1)+(2)+(3)+(4)=655

を蓄積した政治的有力者を象徴するものもある。その意味において、それらは戦闘関係の資料としての性格も有しているといえる。

ソロモン諸島におけるキリスト教の布教が急速に進展したのは、1890年代である。その時期は、それまでの戦闘の時代が終焉へ向かう兆しをみせはじめたときでもある。当時の戦闘は、同じ島内に居住する集団の間で、勢力争いや伝統的な財に関わるトラブルなどを原因とした「小競り合い」のようなものもあったが、その時代を象徴する戦闘の形態は「首狩り襲撃」(head-hunting raid)であった。その最も強力な武装組織を形成していたニュージョージア諸島の集団は、近隣のチョイスル島、サンタイザベル島はもとより、ガダルカナル島やゲラ島などへも遠征した。

首狩り襲撃は、文字通り襲撃先で首級(とくに政治的有力者や戦士リーダーのもの)をあげることが第1の目的であったが、それに加えて女性や幼児を一種の奴隷として連れ帰ることも重要な目的のひとつであった。遠征隊は政治的指導者の指示で、複数の集団が連合する形で組織された。1回の遠征にトモコ20艘、戦士500人を擁したという。

そのような遠征に用いた特別なカヌーを、ロビアナ語で「トモコ」(tomoko)と呼ぶ。G. ブラウン・コレクションの中にも、そのミニチュア模型が含まれている。実際に用いられたトモコは、全長約10メートル、幅約1メートルで、カヌーの前後が2メートルほど大きくせり上がっていた。せりあがり部分と胴体にはシンジュガイの螺鈿が施され、さらにせりあがり部分には白いウミウサギの貝や赤い鳥の羽からつくる装飾が取り付けられていた。また、船首部分の喫水線付近には、「ヌズヌズ」(nguzunguzu)と呼ばれる神像(コレクションでは「カヌー船首飾り」と記載)がくくりつけられた。それは、風や波をおこしてカヌーを転覆させて乗組員を食べてしまうと信じられた水の霊ケソコを寄せ付けないためのものである(福本 1996: 183)と同時に、遠征の成功を保証するものでもあった。

首狩り襲撃で得た「首」は、トモコやそれを格納するカヌー小屋に対する捧げものであり、新しいトモコの建造や進水式にも必要とした。カヌー小屋は首の保管場所であり、集団の安全を祈願する儀礼の場でもあった。また、政治リーダーの死に際しては、遠征であげた首や奴隷として連れてこられた者の首が、死後の世界における政治リーダーの従者として祠に供えられた。

ソロモン諸島を含むメラネシア地域の政治リーダー(ビッグマン)は、世襲的にそ

の地位を相続するというよりも、他の人びとに優る自らの能力を効果的に社会に示すことを通じて得られたものである。とくに、戦闘における活躍とそれから得られる名声は、政治リーダーになるために必要不可欠な要素であった。コレクションの中にあるシャコガイ製の首飾りや伝統的財貨、イルカ歯、赤色の二枚貝、白色のトリガイなどを使って製作された腰帯、円盤状の頭飾りなどは、そのような文脈における政治リーダーや戦士リーダーのみが使用することのできたものである。これらはニューギニア諸島のものであるが、その他にチョイスル島で収集されたシャコガイ製のドーナツ型貝貨や円筒形貝貨などにも、同様の象徴性が付与されていた。

チョイスル島では、他集団との戦闘の際に援軍を差し向けてくれた集団に対するお礼や、依頼した殺人や呪術を実行してくれた他集団の個人（あるいはその個人の属する集団全体）に対するお礼のために、ケロ (qelo) と呼ばれる饗宴を催した。通常、この饗宴は政治リーダーが主催し、大量のタロイモ、カナリウム・ナツ、ブタなどの食料と、報酬としてのシャコガイ製円筒形貝貨が用意された。またこの饗宴はパンパイブの合奏を合図にはじまった。キリスト教化される以前の時代において、パンパイブは集団を代表する政治リーダーが主催する公的な饗宴行事においてのみ演奏されるものであった (MABO Project 1996 : 48-50 ; 田井 1996 : 191)。その饗宴の規模や支払われる貝貨の額は、主催者である政治リーダーの名声にも大きく関わる事柄であった。

このように、G. ブラウン・コレクションの中でも、戦闘関係の資料はもちろんのこと、装身具や儀礼関係の項目に含まれる資料の多くは、政治リーダー（あるいは戦士リーダー）の名声の蓄積に関連した「戦闘の文脈」に組み込まれるのである。

3. 戦闘の時代とヨーロッパ人

「ソロモン諸島は激しい戦闘の坩堝である」という主旨の文言は、19世紀のソロモン諸島、とくに西部地域や中部地域に関するヨーロッパ人の記述に、頻繁に登場する。そしてそのような状況であったからこそ、労働者狩りをおこなうヨーロッパ人も、救世主的精神に満ちたキリスト教宣教師も、容易にそこに近づくことができなかったのである。G. ブラウン・コレクションのソロモン諸島関係資料の大半が「戦闘の文脈」に貫かれる所以である。

19世紀後半期という時代に限定して考えてみると、ヨーロッパ人が恐れて近寄るこ

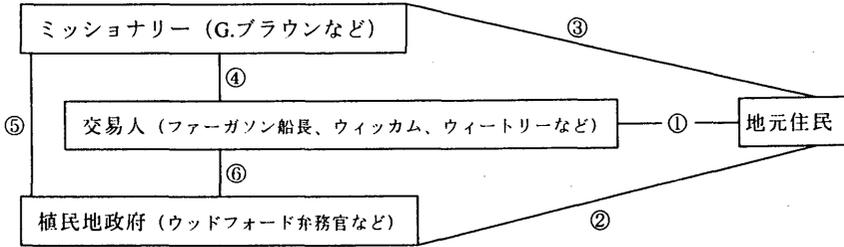


図2 ヨーロッパ人と地元島民をめぐる相互関係

とをためらったソロモン諸島の社会状況も、実はソロモン諸島民をとりまくヨーロッパ人の存在と密接に関連していた。図2は、ブラウンがソロモン諸島と関わりをもつ過程において登場するヨーロッパ人相互の関係を、現地の島民も交えて示したものである。ここでいう「地元住民」とは、主としてニュージョージア諸島民をさす。

ニュージョージア諸島民とヨーロッパ人との接触の機会が飛躍的に増加し始めたのは、1830年代である。当初、捕鯨船が水や食料の補給のために立ち寄るだけであったが、やがてソロモン諸島で採取されるナマコ、タカセガイ、シンジュガイ、コブラなどを取り引きする交易船が訪れるようになった。とくにここで、①の関係において注目したいのは、ヨーロッパ人の側が交易品として差し出していたものである。1844年までに、ニュージョージア諸島民の武器は、旧来の槍や棍棒、弓矢などから、ヨーロッパ人との交換によって得た銃器（マスケット銃など）や鉄製品（斧など）にとってかわったという（Zelenietz 193: 94）。ニュージョージア島ロビアナ地域に居住していた前述の交易人ウィッカムは、ロビアナの政治リーダーであったインガヴァのカヌー小屋近くに住み、さらに土地を割譲されるまでに信頼を得ていたのであるが、それは彼がインガヴァの交易相手として多くの鉄製品や銃器をもちこんだことを示していよう（Golden 1993: 206）。その交易を通じて、インガヴァは強力な武装集団を組織することができ、積極的に、そして武器の耐久性の向上から頻繁に、近隣の島じまへ遠征をしかけるようになった。つまり、①の関係は、伝統的な文脈における政治リーダーの名声の向上にとって、不可欠な要素となったのである。

さて、そのような状況に対して、1896年から実質的な統治を開始した植民地政府は、1899年から1900年にかけて、首狩り襲撃の遠征隊を派遣するニュージョージア諸島の集団に対して、村の焼き討ちなどの徹底した弾圧をおこなった。植民地政府は、経

済振興をはかるためには、ココヤシやゴムのプランテーションに関心を抱くヨーロッパ人の投資家を誘致するしかないと考えており（部分的に⑥の関係）、そのためにはヨーロッパ人が恐れる戦闘状態を終息させる必要があった（Bennett 1987:105）。つまり、①の関係において頻発化、過激化した戦闘状態を、②の関係において、さらに強力なヨーロッパ人の武力を示すことを通して終息させたわけである。このソロモン諸島（とくにニュージョージア諸島）の「平和化」は、⑤の関係（植民地政府による布教協力）や④の関係（ウィッカムやウィートリーによる布教活動への期待、布教活動への協力）を経た上で、最終的に③の関係（島民に対する布教活動）において確立した。ブラウンがニュージョージア諸島を視察した年が、植民地政府による焼き討ちの翌年であったという事実は、そのことを端的に示しているといえよう。

G. ブラウンは、直接的には宣教師として③の関係（布教）にのみ関係していたのであるが、彼とソロモン諸島との関わりの歴史において、ヨーロッパ人交易人との関係やウッドフォード弁務官との関係も、間接的にメソジスト伝道団の布教と関わっていたのであり、決して無視できるものではない。つまりブラウンは、ヨーロッパ人と地元島民との関係において生成・消滅した19世紀後半期の「過激な」戦闘の文脈に、確実に組み込まれていたのである。

G. ブラウン・コレクションの中のソロモン諸島関係資料は、「戦闘の文脈」に貫かれている。そして、その文脈を構成するキリスト教宣教師のブラウンがそれらを収集したという事実は、単にそれらが「珍しい」民族誌資料としてだけあるのではなく、その背景にあるヨーロッパ人と地元島民、ヨーロッパ人とヨーロッパ人の関係を通して、その時代の姿を臨場感あふれるものとして、如実に映し出すのである。

文 献

Alasia, S.

1988 Population Movement. In H.Lracy (ed.), *Ples Blong Lumi: Solomon Islands, The Past Four Thousand Years*, pp.112-120. Suva: The University of the South Pacific.

Bennett, J.

1987 *Wealth of the Solomons: A History of a Pacific Archipelago, 1800-1978*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Brown, G.

- 1978 *George Brown, D.D. Pioneer-Missionary and Explorer, An Autobiography*.
New York: AMS Press. (Reprinted from the edition of 1908, London,
by Hodder and Stoughton).

Corris, P.

- 1973 *Passage, Port and Plantation: A History of Solomon Islands Labour
Migration 1870-1914*. Melbourne: Melbourne University Press.

福本繁樹

- 1996 「造形表現の世界」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌－文化
歴史・社会』、pp.181-189、明石書店。

Golden, A.R.

- 1993 *The Early European Settlers of the Solomon Islands*. Author's Publication.

石森秀三

- 1988 「福音と殺戮、そして民族学－ジョージ・ブラウンの生涯」『民博通信』40, 40-60。

MABO Project (ed.)

- 1996 *The Traditional Culture of Sirovanga, Choiseul Island, Solomon
Islands*. MABO Project Report 3. Honiara: MABO Project.

関根久雄

- 1995 「『ボヴォエ』の復活－ソロモン諸島チョイスル島ササムンガにおけるリーダーシッ
プ」『民族学研究』59 (4), 415-427。

田井竜一

- 1996 「音楽芸能の諸相」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌－文化・
歴史・社会』、pp.190-204、明石書店。

Tippett, A.

- 1967 *Solomon Islands Christianity*. London: Lutterworth Press.

Zelenietz, M.

- 1983 The End of Headhunting in New Georgia. In M.Rodman (ed.), *The
Pacification of Melanesia*, pp.91-107. Michigan: University of Michigan
Press.

